森の名手・名人シリーズ No.20

名人　立石　清治(50)　岐阜県郡上市
聞き手　中西　悠太　岐阜県立郡上高等学校2年

平成19年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては、現在、38名の「森の名手・名人」がいます。
この「森の名手・名人」を「森の"聞き書き甲子園"」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

キハダ樹皮(黄檗)など薬用産物の利用

薬種という仕事

1. 修行時代

名前は薬種ってことになるんかな。薬の原料を扱う仕事です。

高校を卒業して大阪の問屋さんに修行で行ったんですよ。薬種問屋さんてのは、漢方薬の原料を仕入れるんですね。大阪におった時の仕事は一般的な生薬っていうんかね、薬の勉強やね。営業の勉強なんてのはやらんかったし、半年はその会社の中におって、受付とか雑用とかもやりましたね。やっぱし初めての仕事やったから何も分からんからね。目で見たり聞いたり触ったりして、事務所で勉強した。

半年過ぎてからは、発送センターっていう、荷物を配達にだしたり、仕入れた荷物が入ってきてその中身を検査とかするとこに行った。配達もやったことあるし、大阪市内から神戸とか京都までトラックでね。その会社の工場ってのがあるんですよ。週に3回、工場でできたやつを大阪の問屋さんへ持っていったりね。自分の家もこういう仕事やし勉強になったね。

2. 今の生活になるきっかけ

今の仕事を始めたきっかけは大阪にいったからってのもあるけど、親父のおとうさんがね、一番最初にこういう仕事をやりだして親父があとを継いで。で、僕も最初はそんな気はなかったんやけども、5年間大阪におって、その大阪の会社がうちと昔からの取引があったもんで、仕事も分かったし、まぁやってみようかなと。継ごうと決心したのは、まぁ辞める1年くらい前かなぁ。

3. 薬について

黄檗(オウバク)ってやつが本来の名前なんですよ。この辺ではキハダとか、キワタとかいうんですね。キハダは一番早く葉っぱが落ちるんですよ。春は他の木より早く葉が付くんですよ。キハダ自体が成長がいい木なんですよ。日当たりのいいとことかはよけいにね。郡上では量があまりできないもんで、富山県とか滋賀県とか、わりと暖かいとこのほうが質が良いんですよ、キハダ自体が蜜柑科やからね。キハダやオウレンなんかの成分にね、ベルベリンってのがあるんですよ。薬になる原料ですね。寒いとこのはベルベリンが少ないんですよ。

キハダの木って一枚皮がかぶってるっていうんかね、外皮と内皮ていうのがあるんですよ。その外皮が7月10日過ぎくらいからでないと剥けないんですよ、内皮とひっついてまって。外皮を剥かないことには内皮がとれないから、一番剥けるっていうと7月20日くらいから8月の始めくらいまでかな。それ以降はもう無理ですね。

それ以降はオウレンですね。薬草なんですけど。これは根っこをつかうんですよ。オウレンは業者さんが山で作ってきたやつを買ってきて、うちのほうで選別をやるんですよ。それで良いものだけを選んでね。オウレンの栽培もやってますよ。山にまいてますけど山のオウレンは、年数が20年くらいかな。今買ってきてるやつは、畑で栽培をやっとるやつなんですよ。畑やったら6年か7年で採れますからね。

他にホオノキの皮とかをやってますけども。それは製材へいって剥くんですよ。この辺はもうそういうことする製材はないけども、高山の方なんかへ行けばまだありますわね。製材は中の材木が欲しい訳で、皮がいらないんですよね。で、皮とかくっついてる石とか邪魔やもんで剥いてもらうと製材のほうも嬉しいし、うちのほうも嬉しいもんで両方いいことがあるから。

他にサクラとかもやってますけど、そんなに量がでないんですよ。

量的にはやっぱりキハダが一番多いかな。値段もいいし、山なんかで毎年とる人はやっぱしお金がやった分だけもらえますからね。あとは薬草やね。オウレンとか。キハダの木の下にオウレンが生えてますから。でもキハダがあるからオウレンが生えてくるって訳ではないんですよ。完全に別物なんですけどね、キハダの木の下にはよく生えてますね。

▲自己所有山林でキハダを育成

4. 仕事の流れ

キハダの皮ですね、昔から毎年その時期になると剥く人がいるんですよ。剥いたやつを買い取るんですよね。問屋さんと剥いている方の仲立ち、仲買人ってことになるかな。

僕もたまには剥いたりしますね。自分とこで育てたやつはね。一回少しだけ剥いて使えそうか確認してから伐採をするんですよね。それで、倒してからある程度の長さ1mやったら1mの長さの両端に皮剥き用の鎌で一周軽く剥くんですよ。先っぽでぐるっと切れ目をいれるんですよ。実は時期になると手で簡単に剥けるようになるんですよ。剥ぐ前に黄色い皮の上側に普段見えてる外皮を剥ぐんですよ。いれた切れ目が中まではいってるからね。それで木を縦に切るんですよ。切ったほうが剥きやすくなりますからね。あとは手でもできるから。浮いた状態の皮を剥ぎとるだけやね。普通は鉈でもやるね。先がとがってるから。

うちのほうではまず剥いた皮を集めますが、中には乾燥させるのが面倒臭いという人もいて生でもってくるんですよ。木から剥いたやつを生でとってきて、うちのほうで乾燥するのが大体ですね。干す時はできるだけ天日干しのがいいです。加工としては直接うちのほうでするんではなくて工場へ送るんですよ。そこからメーカーさんのほうに行って薬になるんですね。

キハダは粉末にしたり、エキスにしたりと加工して、薬として使う訳やからね。胃腸薬とか湿布なんかになりますわね。大手の衣服のメーカーさんとかは染料にもキハダを使うって聞いたけどもね。

▲キハダ樹皮加工作業

5. 失敗談

品物としてせっかく剥いたやつが売れなくてね。それで傷んじゃって送れなくて、廃棄処分になってしまったりね。もったいないって事。なんせ工場とかで作られるような物とは違いますからね。自然から採れるものだし、廃棄はとても残念やったね。あとはキハダを業者さんから買ってきて、工場で成分検査をするんですよ。ベルベリンの量とかを調べたりするんやけども、ベルベリンがある程度ないとダメなんですよ。僕らのほうではそういう検査はやらないもんで買ってきて工場に出した後にベルベリンが低いとかね。そうなると使えなくて廃棄されちゃうんかな。

6. 林業グループでの貢献

林業グループでの活動ってのは僕は今年初めてなんですよ。8月の始めくらいやったかな、白鳥の林生会っていうんですけどね、キハダの剥く指導しにいったんです。2、30人くらいおったんかな、森林組合の若い人もおったし。まぁ年齢差はあったね。

7. 三十年の経験

キハダなんかを剥くのも長年やってきてるから手際よくできるわね。もうこれで30年になるし、木を見れば大体は分かるしね。この木は使えそうだとか、まだ剥くには早いとか。皮の薄いのは良くないね、厚いほうがいいんやけど。年数がたつと皮がだんだん厚くなってくるんですよ。あとポリシーはやっぱりありますよ。いい品物が欲しい、悪い品物は送りたくないっていうんかな。品質にはこだわってるね。

この仕事やってて良かったなぁって思うことは色んな人と出会えることかな。やっぱし年配の人っていうんかな、話ができて色んなことが教えてもらえるし。やりがいはあるけど、今は非常に厳しい時やね。輸入物に押されて。大変なことは何もかも自分でやらんと、いかんから、大変だね。今はもう完全に一人でやってるからね。

▲自己所有の乾燥ハウスでの作業風景

8. 受け継がれるもの

後継者はね、どうかな。こういう仕事も、木がなくなってくると大変やろうし。まだ今の所はうちの子はそういう気持ちはないと違うかな。高校卒業して、今は自衛隊に行きよるんやけど、前に自分とこの山を一緒にまわったんやけど、大して興味もなさそうやったなぁ。

親父の仕事を見ててね、大変だったろうなと思いましたね。自然が相手やから。で、師匠が親父なんですよ。親父は教えてくれるっていうよりも一緒にやって見て覚えたって感じかな。ほんで一緒にやってみて、出来んかったら教えてくれたりしたんやけど。うちの林にある木なんかはちょうど25年くらいたってるかなぁ。うちの親父が植えたやつなんやけどね。6年くらい前に1本間引きをしたんやけどね、周りの木に栄養がいくようにね。向こうなんかでも細いでしょ、これとくらべると。あっちのもやっぱり1本か2本切らないといかんのやけどね。間伐するのもやっぱり剥く時期にやる。間引きしたものは、やっぱり皮が薄いんですよ。木の年数も短いし。あんまり良いものではないね。だから皮の厚いとこだけ使うようにしとるんですよ。間引いた方がやっぱり太さが違うね、年数一緒なのに全然違う。

この林なんかそうやけど親父から受け継いだ土地とかね、技術なんかをこれからも大切にしていきたいと思いますね。

名人　立石清治(たいしせいじ)さんのプロフィール

●生年月日：昭和32年2月13日生まれ
●出身地：岐阜県八幡町尾崎
●職　業：薬種

高校卒業後、実家の得意先である大阪薬種問屋に就職。5年間の修行後、自営で薬用産物採取販売を始める。現在は本職のかたわら、地元林業グループでの活動や、岐阜薬科大学の学生への指導と様々な場所で貢献されている。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
㈳岐阜県緑化推進委員会　佐藤正吉】